

## 明治スフィンクス史 (1)

—— 初期 (明治 10 年代まで) ——

岡崎 一

### 序論

スフィンクス関連文献は、枚挙に暇がない。世界文芸的に見ても、戯曲ではソボクレスの悲劇『オイディプス王』、ゲーテ『ファウスト』第 2 部 (1832) 第 2 幕の「古代ワルプルギスの夜」、散文では Thomas Carlyle の社会評論集 *Past and Present* (1843) 第 1 巻第 2 章の章題 (“The Sphinx”)、Oscar Wilde の短編小説 “The Sphinx without a Secret” (1887)、アンデルセンの長編小説『即興詩人』 (1835)、詩では Ralph Waldo Emerson の “The Sphinx” (1841)、Oscar Wilde の *The Sphinx* (1894)、ツルゲーネフの散文詩「スフィンクス」 (1878) などがある。

それでは日本で、スフィンクスはどのように受容されてきたのか？ アメリカ人 Richard Quaterman Way (漢名は禔理哲) 『地球説畧』 (寧波：華花聖經書房、1856) が幕末には既に移入され、箕作阮甫 (訓点) 『地球説畧』3 巻 (老皂館、1860) として出版されていたが、その「亞非利加大洲圖説」の「埃及國圖説<sup>又名要西</sup>」には次のような箇所がある。

又有異者、有石成奇狀一、甚長甚大、頭面如人形、其下半初被砂土淹沒、未知何像、後掘得之、見爲獸身而四足、兩足之間、有石屋、如廟宇狀夾之、(下巻 75[上巻からの通し丁]表)

上記は勿論スフィンクスのことで、中国本あるいは箕作本を通して幕末には既にスフィンクスが日本に紹介されていたことが判る。また、箕作本は明治 4 年に再版されている (初版が江戸本なので、たとえ再版が明治本でも、以後、本稿では箕作本のような事例は取り上げない)。

筆者の関心は、近代日本、より具体的には開国したての明治という時代に、スフィンクスがどのように受容されてきたのかにあり、これを明らかにすることが本論文の趣旨である。以後、時系列的に文献・事象を取り上げ、分析を試みる (出版[場合によっては届や免許]順、副題は原則として省略、出版地が東京の場合は出版地名を省略)。

分析対象の文献・事象については、紙幅を考慮し、冒頭に○囲いの通し番号を付

記した。改暦 (明治 5 年 12 月 3 日＝明治 6 年 1 月 1 日) 以前の年月日は、旧暦表示である。旧字体 (旧漢字・変体仮名・合字など) は、原則として新字体に改めたが、(特に表題などでは) 残した場合もある。版權・板権などの異表記は、差支えない限り、通行表記 (版權) に統一した。ルビは、パラルビとした。右ルビ・右傍線などについては注記せず、左ルビ・左傍線などについてのみ注記した。(返り点などで) 文字列の左右を同時に使用している文献については、右付きを上付きに、左付きを下付きに変更した。補訂・補足などは、[ ] で示した。漢数字は、原則としてアラビア数字に改めたが、(特に表題などでは) 残した場合もある。〈丁〉や〈ページ〉 (頁、p.あるいは pp.) 自体の記載は省いた (〈丁〉の場合は数字と表・裏、〈ページ〉の場合は数字のみで記載)。当時と現在との語義の相違などについては、一々注釈・解説しない。テキスト・画像は、原典、近代デジタルライブラリー (国会国会図書館)、リプリント日本近代文学 (国文学研究資料館)、個人全集・画集、『明治文学全集』 (筑摩書房)、Web 公開文献などに拠ったが、著作権的に問題のないものについては、原則として一々は断らない。

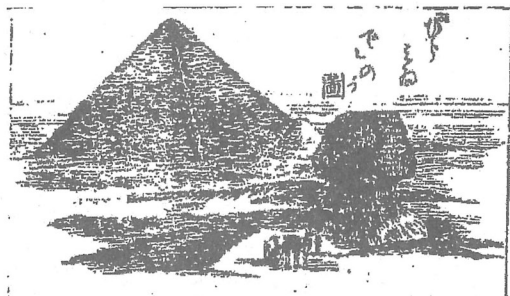
インターネット情報は言うに及ばず、『広辞苑』 (岩波書店)、『<sup>新編</sup>明治編年史』 (財政経済学会、1934-36 年)、『明治ニュース事典』 (毎日コミュニケーションズ、1983-86 年)、『近代日本総合年表』 第 2 版 (岩波書店、1984 年)、宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』 明治大正言論資料 20 (みすず書房、1985 年) などの辞典・事典類からの引用についても、既知事項であるため、原則として一々は断らない。

著名人については、補足説明を省くか簡略に止めた。

## I. 明治初期 (明治 10 年代まで)

### ①福澤諭吉 (編訳) 『<sup>新書</sup>世界國盡』 卷二『阿非利加洲』 (慶應義塾、明治 2 年 8 月)

の本文にスフィンクスは現れていないが、上段の頭書に次のような「<sup>かしらがき</sup>びらみめで」の圖」



があり (本文では“<sup>ひらみゐで</sup>比羅三井天” [4 表])、スフィンクスも描かれている (5 表)。

②青木輔清 (訳)『萬國奇談 <sup>七不思議</sup>』(甘泉堂、明治 6 年) 卷之一の「○埃及石塚の事」に次のような箇所がある。

又此[石塚 (ピラミッド)]近邊に石にて造たる長大の奇なる人形あり遙に之を望バ宛も絶大の女子地中より首を<sup>おなこ</sup>出せるに似たり今は半身砂の中に埋りて其形何物たるをしらず只地上に<sup>いつ</sup>出る処は首より頭計<sup>ばかり</sup>なれども其高さ二丈七尺余其後之を<sup>ママ</sup>堀て見るに石にて造たる大なる獅子の上に跨り其足の間には石の屋<sup>へや</sup>ありて其形廟宇の如し是を以て察するにこれも矢張死人を葬りし廟なるべしといふ (17 表・裏)

これには次のような「埃及国石塚の近辺に在る異像の圖」(17 表)



も付けられているが、極めて興味深いのは、通常のスフィンクス画とは異なり、髭・鬚を生やした男子像になっている点で、言わば幕末に流行した《北亞墨利加人物 ベルリ像》(筆者不詳、嘉永6年頃)・《北亞墨利加人 アハタムス像》(筆者不詳、嘉永6年頃)・《合衆國人物蒸氣船圖繪》(筆者不詳、安政元年頃)(小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史』1『黒船来航』[講談社、1977年]1、8-9)のような異人画(錦絵)の後裔というところであろう。訳者の青木(号は東江)は東京府平民。多作で、教科書・参考書類の他、歴史・英学関係などの著作もある。また、『民間の喩』(同盟社、明治8年1月創刊)の編述者、『民間の喩演説集誌』5巻(同盟舎、明治11年4月—明治12年6月)の編輯兼出版人でもあった。

③Richard Quarterman Way (赤澤常道 直訳)『地球説畧和解』巻之四(甘泉堂、明治7年)の「埃及國ノ圖説<sup>又東西ト曰フ</sup>」に、次のような「石塚」図(18裏)





があり、ピラミッドと共にスフィンクスも描かれている。また、次のような箇所がある。

アヤ コトナルカタチ  
又異シキ者有リ石アリテ 奇 状 フ成スコトナリ甚タ長クシテ甚タ大ナリ

カシラツラ カタ  
頭 面人ノ形チノ如シ其下半ヲ砂土ニ淹没セラレテ未タ何ノ像チナルヲ知ラ

【ママ】  
ス後チ之レヲ 堀リ得ルニ獸身ニシテ而シテ四足タルヲ見ル兩足ノ間ニ石屋ア

リ廟宇ノ状ノ如キ之レヲ夾サム (19 表・裏) ※ “<sup>コトナルカタチ</sup>奇 状” と “<sup>カシラツラ</sup>頭 面” は  
左ルビ。

直訳者の赤澤は東京府平民で、曾先之 (支那) 編『啓蒙十八史略』15 卷 (山中市兵衛、明治 9 年) の直訳書などもある。

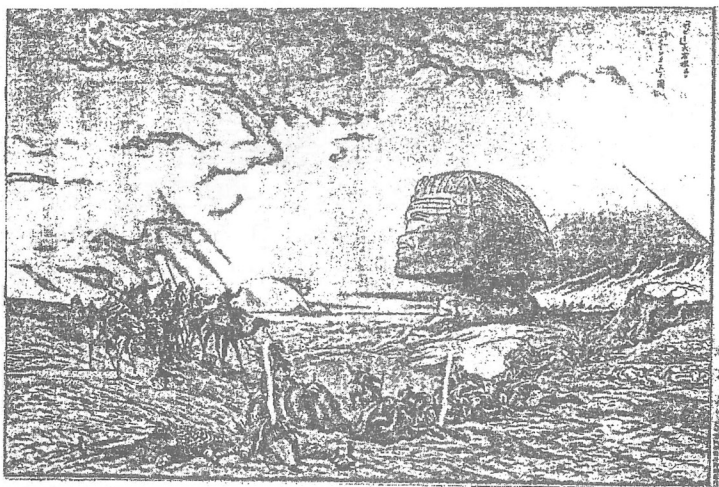
④石黒 厚 (訳)『輿地新編』開之卷[「亜弗利加」篇] (栗田、明治 7 年)「埃及」の項に次のような箇所がある。

紅海とナイルの間に高邱あり此の近傍に奇異の石塚多し其の形状多く尖りたる

ものにて就中婦人の首に類似するもの地上に抽出す (10 表)

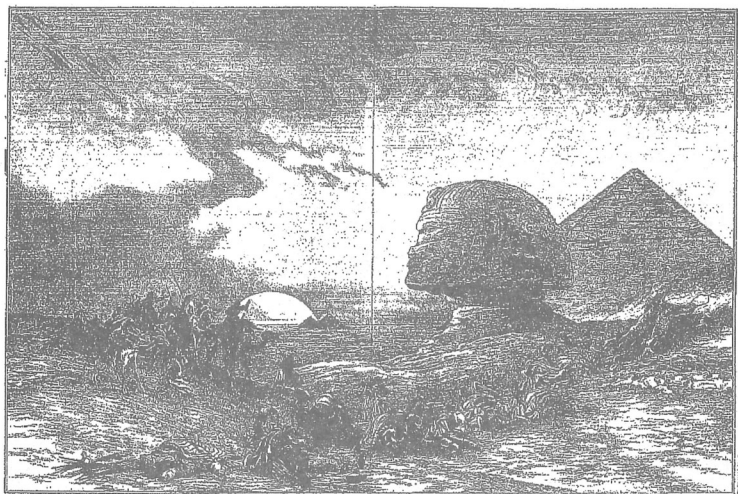
訳者の石黒は尾張 (愛知県) 人で、イギリス人医師 Benjamin Hobson (1816-73、漢名は合信) 『全體新論譯解并圖式添』3 卷 (静観堂、明治 6・7 年) の訳書もある。

⑤松田緑山 (1837-1903) の銅版画《「ギゼー」大石塚<sub>并ニ</sub>「スフィンクス」ノ圖》



は、イギリス人画家 David Roberts (1796-1864) の石版画《熱風の接近》*Approach of the Simoon* (1839) を“模写再刻”したものらしい。この銅版画を紹介した山田邦和「日本人が描いたピラミッド」(『花園史学』第 27 号、2006 年 11 月) は、“この画の製作年代を限定する資料を持たないけれども、おそらくは明治維新の前後の時期だと考えてよいと思う”と推定しているが、父の松本保居 (京都で銅版工房「玄々堂」[初代]を営業) の跡を継いで、東京京橋区呉服橋で銅石版印刷所「玄々堂」(二代目)を開業した明治 7 年以後の作品ではあるまいか。後に内田正雄 (纂輯) 『輿地誌略』(明治 8 年 3 月 3 日官許) 巻八に問題の緑山画の模写が現れているので、問題の緑山画が明治 8 年 3 月以前の作であることは確実である。

⑥内田正雄 (纂輯) 『輿地誌略』(修静館、明治 8 年 3 月 3 日官許) 巻八『亞非利加洲之部上』の「埃及附阿比西尼」に、次のような中九金峯 (模跡) 「「ギゼー」大石塚<sub>并ニ</sub>「スフィンクス」ノ圖」(29 表・裏) がある。



これは松田緑山《「ギゼー」大石塚<sub>并ニ</sub>「スフィンクス」ノ圖》の模写である。また、次のような箇所がある。

第二ノ石塚ノ前面ニ「スフィンクス」ト名<sub>ル</sub>奇物アリ巨大ナル佛頭ノ如<sub>キ</sub>モノ土中ヨリ突出セルヲ見ル元来大石ヲ刻鑿シテ造ル所ニ係リ人頭獅身ノ神獸ヲ表セル者ニシテ其状蹲踞スト雖<sub>モ</sub>大半砂中ニ埋<sub>リ</sub>テ肩ヨリ以下全ク見<sub>ヘ</sub>ス其頭ノ周圍十七間、高<sub>サ</sub>略五間餘現<sub>ハ</sub>ス所跡ノ長<sub>サ</sub>八間餘アリ 番テ沙上ヲ穿チ之ヲ搜索セシコトアリ 高<sub>サ</sub>九間二尺全身ノ長<sub>サ</sub>廿八間四尺アリ (30裏)

該当書については、後に明治8年12月19日著作権免許のものも出版されている。纂輯者の内田 (1839-76) は東京府士族 (旧幕臣) で、オランダ留学後、大學南校中博士・大學権大丞。主要業績はベストセラー『輿地誌略』10巻 (明治3-10年) の編訳だが、(編輯)『海外國勢便覧』(大學南校、明治3年)、(訳述) Marin Henri Jansen (オランダ海軍軍人)『海軍沿革論』4巻 (大學南校、明治4年)、(訳)『和蘭學制』(開成學校、明治8年) などの編・訳書もある。

⑦Richard Quarterman Way (福田敬業 訳解)『地球説畧譯解』卷之三『亞非利加大洲圖説』(寶集堂、明治8年3月29日官許、明治8年10月15日著作権免許) の「埃及國圖説<sub>ト名ツク</sub>」に次のような箇所がある。

又異ル石アリ奇状ヲ成ス一甚タ長ク甚タ大ニシテ<sup>カシラカホ</sup>頭面ハ人ノ形ノ如シ、其下  
 ノ半ハ<sup>ドロ</sup>砂土ニ<sup>ウツメ</sup>淹没ラレ未タ何ノ<sup>カタチ</sup>像タルヲ知ラズ、後之ヲ掘リ得シニ<sup>ケモノカラダ</sup>獣身ニ  
 シテ四足アルヲ見、両足ノ間ニ石ノ<sup>イヘ</sup>屋アリ<sup>ハカ</sup>厩宇ノ<sup>カタチ</sup>状ノ如シ、之ヲ夾ム (7 裏  
 -8 表)

訳解者の福田 (1817-94) は出版人で、Benjamin Hobson (合信)『博物新編』4 卷 (福田敬業、明治 8 年) や『博物新編註解』5 卷 (寶集堂、明治 9 年) などの訳書・註解書もある。

⑧ Peter Parley (アメリカの出版業者・流行作家 Samuel Griswold Goodrich [1793-1860] の筆名) [牧山耕平 訳] 『<sup>業</sup>萬國史』(文部省、明治 9 年 3 月) 第四十章「亞非利加／埃及ノ建築並ニ彫刻」第九節 (段落) は、次のようになっている。

④ スフィンクスモ亦埃及ノ古物中ノ一ニシテ最モ奇トスベシ即チ獅子ノ體上ニ婦人ノ大ナル頭ヲ造リタル物ナリ當今其下部ハ沙中ニ埋没シテ地上ニ現ル、所ノ上部ハ其頭頸ノミ是レ堅キ岩石ニテ造リタル物ニシテ其高サ二十七尺ニ至ル遠ク之ヲ望メハ其狀恰モ大ナル扁鼻ノ婦人沙中ヨリ出ントスルガ如シ (185-86) ※ “スフィンクス” は左傍線。

対応する原書は *Universal History: On the Basis of Geography* (1837) であり、原文は以下の通りである。

9. The sphynx is one of the most curious among the Egyptian antiquities. It was originally the gigantic head of a woman, on the body of a lion; but the lower part is now buried in the sand. The part which remains above ground is the head and neck. These are twenty-seven feet high, and are made of solid rock. At a distance, it looks as if a great flat-nosed woman were rising out of the sand. (New ed. [New York and Chicago: Ivison, 1871] 147-48)

牧山訳は、明治 10 年 11 月 (弘令社)、明治 11 年 5 月 - (静岡 : 一貫社)、明治 19 年 5 月 (新古堂)、明治 19 年 9 月 (明治書房) にも再版されている。また、原書は日本国内でも翻刻されており、丸善や桃林堂などから出版されている。なお、原書の一部だけを翻刻したもの——例えば *Readings from Peter Parley's Universal History: Asia and Africa*, The Kobunsha Series of Supplementary English Readers for Middle Schools 13 (興文社、明治 33 年 12 月 7 日) ——も出版されている。牧山は東京府平民で、Alfred Bishop Mason・John Joseph Lalor『初學經濟論』3 卷 (雁金屋清吉・和泉屋市兵衛、明治 10 年) など経済関係の編・訳書が多い。

⑨William Cooke Taylor (木村一步 訳、大井潤一 校)『<sup>監訳</sup>萬國史』巻一 (文部省、明治 11 年 5 月)「上古史」第一回「埃及紀」に次のような箇所がある。

デベス

德伯斯府アリ府内殿堂ノ墟址大河ノ兩岸ニ駢列シ其高サ巍峨トシテ雲際ニ聳へ

山岳ノ如シ府内ニハ巨像「スフ<sub>キ</sub>ンクス」<sup>オベリスク  
半獅半人ノ像</sup>及方塔アリ (2)

原書は *A Manual of Ancient and Modern History* (New York: Appleton, 1867) で、対応する原文 (第 1 章 “Egypt” 第 1 節 “Geographical Outline”) は、以下の通りである。

... Thebes, filling the whole valley on both sides of the Nile with enormous temples, more like mountains than human edifices[,] colossal statues, sphinxes, and obelisks. ... (Rev. ed. [1872] 2)

Taylor (1800-49) は Trinity College (ダブリン) 法学博士。訳者の木村には、Henry Kiddle および Alexander Jacob Schem 編『教育辭林』21 冊 (文部省編輯局、明治 12-18 年) などの訳書もある。

⑩関 惟孝 (編輯)『輿地誌畧字引』巻八巻九之部『亞非利加洲之部』(大阪 : 實文軒、明治 11 年 4 月 29 日届、明治 11 年 5 月 31 日出版) 巻八の「埃及附阿比西尼」に次のような箇所がある。

キフツ 奇物	カハツタメツ フツトウ 佛頭	ホトケ ホトケ 刻鑪	シシン シハノヤウ 獅身	シンジウ フシギナ 神獸	ソノジヤウ ソノ 其 狀
ラシキモノ	ノアタマ	ルコト	ナカラダ	ルケモノ	カタチ
ソンキョ 蹲踞 ウツクマツ テラルコト					

(13 表)

編輯人の関は兵庫県士族で、『日本略史字引大全』(大阪：實文軒、明治 12 年)の編著もある。

①Samuel Augustus Mitchell (松村精一郎[西荘] 訳、藤田利勝[青森県師範学校校長] 関、中村正直[敬宇] 序)『萬國地誌階梯』(江島伊兵衛、明治 11 年 8 月 23 日届、明治 11 年 9 月出版)「亞非利加太洲」の「埃及」の項に次のような箇所がある。

今ニ至ツテ宏壯ナル遺趾多ク。金字形ノ大石塚ハ。基ヨリ頂ニ至リ。五百尺アリ。又 (スフキンクス) ト云女頭獅身ノ怪像アリ。其體半ハ沙ニ埋ム。(67-68)

原書は“(ミッチェル) 氏著大小ノ二地理書”(「凡例」3) ——*A System of Modern Geography: Physical, Political, and Descriptive*, Mitchell's New (Series of School) Geographies 4 (Philadelphia: Butler, 1860) と *The New Primary Geography*, Mitchell's New (Series of School) Geographies 2 (Philadelphia: Butler, 1860) のことであろう——で、対応する原文は以下の通りである。

# EGYPT.

13. On the left bank of the Nile are the pyramids, 69 in number. . . . The base of the largest (the pyramid of Cheops)(*ke' ops*) is 746 feet square,—equal to 13 acres,—and about 480 feet high.

15. Not far from the largest pyramid is the Sphinx, a reclining figure, with the body of a lion, and the mutilated head, bust, and features of an Egyptian woman. It is 60 feet high, and was more than half buried in the

sand. . . (*A System of Modern Geography* [1881 ed.] 402)

# EGYPT.

1. . . . Magnificent ruins and remains are found.
2. The principal pyramid near Cairo is nearly 500 feet high. . . . The Sphinx is a reclining figure of stone, with the body of a lion and the head of a woman. The body is nearly covered with sand. (*The New Primary Geography* [1888 ed.] 85)

両書とも重複している部分があるのは当然のことだが、訳文は *The New Primary Geography* のテキストの方に近い。松村訳は後に松村自身によって校訂され、『<sup>精</sup>萬國地誌階梯』(明治 14 年 2 月 24 日版權免許)として出版されており、該当ページは 61 ページに変っているが、該当箇所に変更はない。なお、原著者の Mitchell (1792-1868) はアメリカの地理学者。翻訳人の松村は石川 (後に富山) 県平民で、聾吃の身体障害者。明治 11 年、東京に遊学し、中村正直の同人社で学ぶ傍ら、中村と栗本鋤雲から鞭撻を受けている。このため編著『江山勝概第一集』2 冊 (松村精一郎、明治 19 年) の序文中中村の撰になっている。また、明治 13 年には私立金沢盲啞院 (日本初の聾啞学校) を創立している。

⑫飯島半十郎 (編輯) 『輿地誌略字引』 (修静館、明治 11 年 11 月 6 日版權免許) の「○埃及附阿比西尼」に次のような箇所がある。

ブツトウ 佛頭	ホトケノ アタマ	コクサン 刻鑪	キザム	ジントウ シ シン 人頭獅身	ヒトノカウヘ シハノカラタ	シンジウ 神獸	ケモノハ カミ	ソンキヨ 蹲踞	ウヅク マル
------------	-------------	------------	-----	-------------------	------------------	------------	------------	------------	-----------

(102 裏)

纂輯人の飯島 (1841-1901、号は虚心) は静岡県士族で、『東京新報』 (明治 6 年 2 月創刊) 発行、洋々社代表で『洋々社談』 (明治 8 年 4 月創刊) 発行、『東洋新報』 (明治 9 年 10 月創刊) 社友。『日本地理全誌』5 卷 (松井惟利、明治 9 年) ・『日本地誌』3 卷 (虚心堂、明治 12 年) などの他、『初學家事經濟書』2 卷 (虚心堂・尚友堂、明治 15 年) ・『幼稚園初歩』2 卷 (青海堂、明治 18 年) など家事や

幼児向けの編著・著書もある。また、『浮世繪師便覧』(小林文七、明治 26 年)や『葛飾北斎傳』2 卷(蓬樞閣、明治 26 年)のような美術関係の著書もある。

⑬藤井維勉(編輯)『輿地誌略』乙ノ部(中嶋清兵衛、明治 10 年 2 月 24 日版權免許、明治 12 年 2 月出版)卷之八「○亞非利加北土」の「○埃及國誌」に次のような箇所がある。

又異物アリ石成竒杖一アリ甚タ長クシテ甚タ大ナリ頭面人形ノ如シ其下半ハ  
[ママ]ハ土砂ヲ被ムリ未タ何ノ像タルヲ知ラス後掘ツテ之レヲ見レハ獸身ニシテ  
[ママ]  
四足タルヲ見ル兩足ノ間石屋アリ廟宇狀ノ如ク之ヲ夾メリ実ニ竒々觀タルモノ  
ナリ (13)

これには次のような「「ギゼー」大石塚<sub>トハニ</sub>」<sub>トハニ</sub>「スフィンクス」ノ圖」(15)





も付けられているが、内田版のものとは大幅な違いがある（ピラミッドを削除し、スフィンクスも薄いスケッチ画になり重厚感がなくなっている）。編輯人の藤井は広島県士族で、教科書・参考書類の著書が多いが、（編）『警察必要』（舒芳閣、明治11年）・『明治新論』（大阪：赤志忠雅堂、明治11年）などの著書もある。

⑭山田行元（編）『新撰地理小志』貞卷[卷四]（香風館、明治12年3月1日版權免許、明治16年6月28日再版届）第四十三章「亞弗利加志の續／尼羅諸國」に次のような箇所がある。

此國埃及には、又獅身像とて、人首獅身の大石像あり。此等の奇迹ハ、蘇土に近きを以て、旅客容易に、これを巡覽することを得るなり。（7裏－8表）

これには「金字塚」図（7裏）も付けられているが、スフィンクスは描かれていない。なお、編者の山田（1850-99）は山形県士族（米沢藩士）で、千葉師範学校長や石川県中学師範学校長を歴任した後、明治13年に文部省に入省した。（主に）Samuel Augustus Mitchell『地學初歩』（富城屋、明治8年）など地理関係の編・

訳書が多い。

⑮青木吉雄 (編輯) 『輿地誌略字引<sup>自意至拾</sup>』 (長浜: 中村藤平; 京都: 中西嘉助、明治12年3月17日届、明治12年4月出版) 卷八の「○埃及附阿比西尼」に次のような箇所がある。

フツトウ 佛頭 ホトケノ アタマ	コクザン 刻鑪 キザ ム	ジントウ シ シン 人頭獅身 ヒトノカウベ シハノカラダ	シンジウ 神獸 ケモノハ カミ	ソンキョ 蹲踞 ウツ クマル
---------------------------	-----------------------	---------------------------------------	--------------------------	-------------------------

(5 裏)

編輯人の青木は兵庫県土族。

⑯松村精一郎 (編)・山本義俊 (校閲) 『萬國地誌階梯附録字解』 (白樂圃、明治14年2月24日版權免許) 「埃及」の項に次のような箇所がある。

ジヨトウ 女頭 オンナノ アタマ	シ シン 獅身 シハノ カシラ	クハイザウ 怪像 アヤシキ カタシロ	ソノタイ 其體 ソノ カラダ	ナカ スナ ウツ 半バ沙ニ埋ム
---------------------------	--------------------------	-----------------------------	-------------------------	--------------------

(17 表)

校閲者の山本は東京府平民で、Francis Wayland『泰西脩身論』3巻 (和泉屋壯造、明治6年)、Ellis A. Davidson の『飲食養生新書』5巻 (萬笈閣、明治8年) や『窮理人身論』2巻 (有隣堂、明治9年)、Benjamin Hobson (合信) 『西醫略論譯解』3巻 (萬笈閣、明治10年) などの訳書が多い。

⑰野々村政也『萬國地理誌』 (神戸・大阪: 熊谷久榮堂、明治15年2月10日版權願、明治15年3月16日版權免許) の「埃及誌」には、次のような「ヒラミット」及ビスヒンクス」ノ図」(28表) ——緑山画の後裔——がある。



また、次のような箇所がある。

此ノ國ハ有名ノ古國ニシテ、三千年以來ノ遺物頗多ク、其ノ中最著ルハモノヲ  
「ヒラミット」「スピンクス」等トス (28 裏)

著者の野々村 (1855-1930、号は悔堂) は鳥取県士族で実業家。明治 23 年に日本銀行に入行し、株式局長などを歴任。後に鴻池合名に入社し、鴻池銀行常務監査役・鴻池家理事を務めた。

⑬田中 鼎 (編輯) 『小萬國地誌撮要附録』 (長岡 : 松田周平、明治 14 年 12 月 22 日版權免許、明治 15 年 6 月 30 日出版) 「亞非利加」の「埃及」の項に次のような箇所がある。

又巨大ナル石像アリ頭ノ周圍十七間高  
サ五間餘半身沙中ニ埋没シテ見ヘズ

(10 表)

編輯人の田中是新潟県平民で、『小學作文的例』5 卷 (長岡 : 松風堂、明治 13 年)・『小學作文的例字箋』 (長岡 : 松田周平、明治 15 年) の他、『小學新潟縣地誌撮要』 (新潟 : 精華堂・鳳儀軒、明治 15 年)・『小學新潟縣地誌撮要圖解』 (新潟 : 精華堂・鳳儀軒、明治 15 年) などの編著もある。

⑭草野 肇 (編)・山本義俊 (校閲) 『萬地誌階梯字引』 (白樂園、明治 15 年 12 月 8 日版權免許) 「埃及」の項に次のような箇所がある。

ジヨトウ 女頭 オンナノ アタマ	シン シン 獅身 シハノ カシラ	クハイザウ 怪像 アヤシキ カタシロ	ソノタイ 其體 ソノ カラダ	ナカ スナ ウツ 半バ沙ニ埋ム
---------------------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------------	--------------------

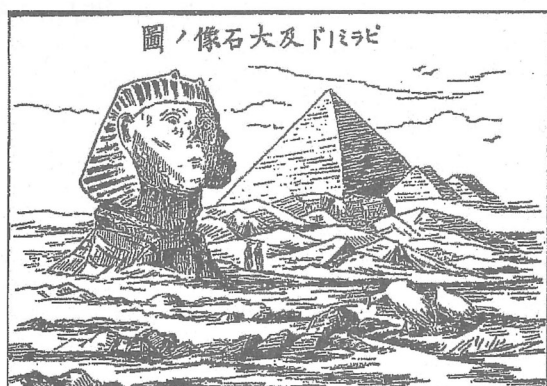
(17 表)

題箋こそ「字引」になっているが、内題は「字解」になっており、内容は⑩と同一。  
 なお、編輯人の草野は東京府平民で、『<sup>官民必携</sup>規則提要』(江島伊兵衛、明治 13 年)や  
 『校正 四書集註字引』(江島伊兵衛、明治 13 年)の編著もある。

⑳三橋 惇(纂訳・編輯)・近藤鎮三(校訂)『<sup>小</sup>輿地誌略』巻下『第四編 各國志  
 下』(修静館、明治 16 年 3 月 13 日版權免許、同月出版)「○亞非利加洲」の「埃及」  
 の項に次のような箇所がある。

今尚<sup>ホ</sup>處々ニ宏大ナル遺址ノ存スルモノ有リ、就中最<sup>モ</sup>著名ナルモノハ上世國王  
 ノ墳墓タル「ピラミット」ト名ヅクル石塚是<sup>レ</sup>ナリ、形三角ニシテ其最<sup>モ</sup>大ナル  
 者ハ高<sup>サ</sup>四十八丈餘有リ、又<sup>ツ</sup>其近傍ニ「スフィンクス」ト稱スル巨大ノ石像有  
 リ、大石ヲ以テ之ヲ作ル、人首ニシテ獅身ナリ、今ハ其體ヲ沙中ニ埋没シ僅ニ  
 其頭部ヲ地上ニ現ハスノミ、其外此類ノ奇物頗<sup>ル</sup>多シ、(3 裏-4 表)

更に次のような「ピラミッド及大石像ノ圖」(4 表)



もあり、スフィンクスがピラミッドよりも大きく強調されている。纂訳・編輯人の

三橋は東京府平民で、(纂訳)『今世西洋英傑傳』4巻(修静館、明治12年)、(訳)『萬國會大要』(巖々堂、明治13年)、(編)『史學教授本』6巻(修静館、明治17年)などの著書がある。校訂者の近藤(1849-94)は浜松県士族で、岩倉使節団に随行(明治4-6年)。三橋(編)『史學教授本』6巻の校訂も行なっており、ドイツ語に堪能だったため Philipp Friedrich Hermann Klencke『母親の心得』上・下篇も訳している(私刊、明治8年)。また、明治9年には〈体育〉という言葉を創始している。

②William Swinton[1833-92、スコットランド生まれのアメリカ人従軍記者・軍事史家、カリフォルニア大学英文学教授](西山義行 訳、中村敬宇 題辞)『萬國史直譯』(開新堂、明治16年4月21日)第一編「古來東方ノ專制國」第二章「エジプト」第二「「エジプト」ノ文明」に次のような箇所がある。

第三十七 [中略]○「メンヒス」ガ「デルタ」ノ頂巔ノ上ミ殆ンド十二里デアリシ○辛シテ場所ノ跡ガ今殘ル併シナガラ「ジーゼ」ニ於テ其レノ大ナル埋葬  
 地ガ猶ホ見ラレテアル○此處ニ大ナル<sup>ピラミード</sup>金字塔巨大ナル<sup>スフィンクス</sup>獅面女身及ビ每里ニ鑿  
 レタル岩ノ石碑ガアル[後略]

第三十八 <sup>[ママ]</sup> 枝 術ノ或ル 枝 <sup>[ママ]</sup> ニ於テ格段ニ建築學ニ於テ「エジプト」人ガ大ナル  
 進歩ヲナセシ○人種ガ實ニ驚クベキ建築ノ性質ヲ保ツタベク見ヘル○「エジプ  
 ト」ノ建築ノ區別サレタル形様ガ其レノ廣大及ビ卓越デアル○巨大ナル獅面女  
 身ノ入り路而シテ方尖石碑ノ線ガ精密ニ建築セラレ[後略] (43-44)

原書は *Outlines of the World's History: Ancient, Mediæval, and Modern* (New York: Ivison, 1874) で、対応する原文は以下の通りである。

37. . . . Memphis was about twelve miles above the apex of the Delta.  
 Cities. Scarcely a vestige of the place now remains; but its great  
 burial-place at Gizeh is still seen. Here are the great  
 Pyramids, the colossal Sphinx, and miles on miles of rock-hewn tombs. . . .

38. In some branches of art, especially in architecture, the Egyptians  
 Architecture. made great advances. The race seems indeed to have had a  
 wonderful building instinct. The distinguishing feature of

Egyptian architecture is its vastness and sublimity. Avenues of colossal sphinxes and lines of obelisks led to stupendous palaces and temples, elaborately sculptured, and containing halls of solemn and gloomy grandeur, in which our largest cathedrals might stand. (Rev. ed. 22)

西山訳については、その後『<sup>改正増補</sup>スウェーデン<sup>スウェーデン</sup>萬國史直譯』(開新堂、明治 19 年 5 月)が出版されており、表記法に相違があるが、“獅面女身”が“女面獅身”に訂正された点が最も重要である。また、西山訳については、後に中山一郎訳(加藤鎮吉、明治 18 年 4 月)という形で出版されている。なお、西山は静岡県士族で東京(後に東京府尋常)中学校教諭。Marcius Willson『<sup>ウキル</sup>ソ<sup>ン</sup>氏第一リードル獨案内』(岩藤錠太郎その他、明治 16 年)などのリーダーの翻訳や『<sup>英</sup>袖珍字彙』(十字屋[岩藤錠太郎]その他、明治 17 年)などの英和辞書の編纂も行なっている。

②Peter Parley (中村 愿 訳述、攻玉社 閲)『<sup>パーリー</sup>萬國史直譯字書』(『<sup>パーリー</sup>萬國歴史字書』改題)卷之三(中村 愿・松井忠兵衛、明治 16 年 4 月 20 日版權免許、明治 16 年 10 月 30 日出版)第四十章に次のような箇所がある。

9.		Which	所ノ
Sphynx	獅身女面ノ像ハ	Part	部分ハ
Egyptian	埃及ノ	Page 148.	
Antiquities	古物ノ	Head	頭
Among	中デ	And	及ビ
Most	最モ多ク	Neck	頸デ
Curious	奇ナルモノ	Is	アル
Of	ノ	These	是等ガ
One	一ツデ	Twenty seven	二十七
Is	アル	Feet	フヒート
Originally	元來	High	高ク
It	夫ハ	Are	アル
Lion	獅子	And	而シテ
Of	ノ	Solid	堅キ
Body	躰ノ	Rock	岩
On	上ニ	Of	カラ
Woman	女	Made	造
Of	ノ	Are	ラルハ
Gigantic	長大ノ	Distance	隔ニ
Head	頭デ	At	於テ
Was	アリシ	It	夫ハ
But	然シナガラ	Great	大ナル
Lower part	下部ハ	Flat-nosed	扁鼻ノ
Now	今	Woman	婦人ガ
Sand	砂ノ	Sand	砂
In	中ニ	Out of	カラ
Buried	埋メ	Rising	起リテ
Is	ラルハ	Were	アリシ
Ground	地面ノ	If	カノ
Above	上ニ	As	如ク
Remains	存スル	Looks	見ユ

訳述兼出版人の中村 (?-1904) は東京府士族で数学者だったが、Marcius Willson 『ウエル第一リードル字書』(中村 愿・松井忠兵衛、明治 14 年) や(抄訳) Noah Webster 『ウェブストル氏スペルリングブック』(中村順三郎、明治 18 年) など英語・英学関係の編・訳書もある。

② Peter Parley (真野秀雄 挿訳) 『ビートル萬國史獨稽古 亞弗利加之部 歐羅巴之部』(競錦堂、明治 15 年 10 月 3 日版權免許、明治 16 年 11 月出版) 第四十章に次のような箇所がある。

9. The sphynx is one of [the most curious among] the  
 Egyptian antiquities. It was originally the gigantic head of a  
 woman, on the body of a lion; but The lower part is  
 now buried in The sand. The part which remains above  
 ground is the head and neck. These are twenty-seven feet  
 high, and are made of solid rock. At a distance, it  
 looks as if a great flat-nosed woman were rising out of  
 the sand. (23-24) ※ルビ (カタカナ) と訳順番号 (漢数字) は省略。訳語  
 は下付き。"the most curious among" 脱落の理由は不明。

挿訳者の真野 (1853-1920、号は観我) は慶應義塾出身で、海軍主計畑を歩み、明治 43 年には海軍主計総監となる。著書が多く、Marcius Willson 『ウエル第一リードル獨稽古』(競錦堂、明治 16 年) ・『ウエル第二リードル獨稽古』(進文館、明治 18 年) や Noah Webster 『ウェブストル氏英學獨案内』(競錦堂、明治 15 年) のような挿訳書もある。

④ Devello Zelotos Sheffield (アメリカ人、漢名は謝衛樓) 口述・趙如光 (清国人)



筆記・岡 千仞 (訓点) 『<sup>正</sup>萬國通鑑』巻之二 (奎文堂その他、明治17年3月) 第二章「論<sup>エジプト</sup>伊及國事畧<sup>エジプト</sup>」 (“伊及” は右二重傍線・左ルビ) に次のような箇所がある。

至<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>基址猶存ス、其中多ク留<sup>ム</sup>古跡ヲ、有<sup>ニ</sup>石像焉、石柱焉、獅身女首之石獅<sup>ニ</sup>焉、(8裏-9表)

『萬國通鑑』の原書は *Outlines of General History* (American Presbyterian Mission Press, 1882)。訓点者の岡 (1833-1914、号は鹿門) は仙台藩士。幕末、大坂で私塾 (雙松岡塾) を開いて尊皇攘夷論を唱え、清川八郎などを教育。慶応2年、藩校 (養賢堂) 指南役。維新後は芝愛宕下の旧仙台藩邸で私塾 (綏猷堂) を開いて福本日南・尾崎紅葉・片山潜などを教育。漢学者で多作だったが、George Payn Quackenbos 『米利堅志』4巻[2冊] (光啓社・博聞社、明治6年) を河野通之と共訳したり、Victor Duruy (高橋二郎 訳述) 『法蘭西志』6巻[3冊] (露月楼、明治11年) を刪定したりもしている。

㊤Peter Parley (栗野忠雄 訳述) 『<sup>ペーリ</sup>萬國史直譯』[上巻] (金章堂、明治18年6月17日版權免許、明治18年7月出版) 第四十章「亞非利加／埃及ノ建築術及ビ彫刻術」に次のような箇所がある。

(九) 獅身女面ノ像ハ埃及古物ノ中デ最モ多ク奇ナルモノ、ハーツデアル○元來夫ハ獅子ノ躰ノ上ニ女ノ長大ノ頭デアリシ然シナガラ下部ハ今砂ノ中ニ埋メラルハ○地面ノ上ニ存スル所ノ部分ハ頭及ビ頸デアル○是等ガ二十七フヒート高クアル而シテ堅キ岩カラ造ラルハ○隔ニ於テ夫ハ恰モ大ナル扁鼻ノ婦人ガ砂カラ起リテアリシカノ如ク見ユ (129)

後に栗野訳は、再版 (明治19年5月8日届)、3版 (明治20年2月12日届) が出版されている。なお、訳述兼出版人の栗野は旧幕臣で、函館戦争にも参加。東京府平民で数学者だったが、Marcius Willson 『ウキルソン氏第一リードル直譯』 (栗野忠雄、明治16年) など英語・英学関係の訳書も多い。

㊤馬場辰猪の自叙伝 “The Life of Tatui Baba” (大半は明治18年10月に箱根の福住楼で書かれ、明治20年11月10日にニューヨークで書き足された) に次のような箇所がある。

ところで、これ[辰猪の滞英当時]は英国に於て政治上の大事件の続々として起つた時代であつた。戦争が露西亜と土耳其との間に起つた。国民間の利害に關係があつたことは勿論であつたので、朝野両党の名たゞる政客等が下院の内外で演説した。實にこれは英国の大政客等がその才能を十分に發揮した時であつた。デイスレエリ氏は此の時に際して、彼の特異の才能を發揮したのだ。彼は、時には、極めて面白い演説を為して、敵党の士に可笑しい綽名をつけた、例へば、ロバート・ロオをば『惡の預言者』などと呼んだのである。けれども、又時には全く黙り込んでしまつて、敵党の議員からの外交政策に関する質問に一言も答へないといふやうなこともあつた。デイスレエリ氏は不可解で、不可思議であるといふのでスフィンクスに喩へられたのであつた。『明治文學全集』  
 12 『大井憲太郎 植木枝盛 小野 梓集』 311)

ディズレイリ (Benjamin Disraeli) は帝國主義路線に立つイギリスの文人政治家 (保守党党首) で、1868 年と 1874-80 年には首相を務めた大物だった。辰猪 (自由民権運動の大立者) の滞英当時 (1875 年 6 月 - 1879 年 3 月) に露土戦争 (1877-78) が勃発した際の首相は、まさにディズレイリだった。“不可解” なディズレイリが“スフィンクスに喩へられた” 史実を伝えている点でも、辰猪の自叙伝は貴重である。

② Peter Parley (戸代光大 訳述) 『容易萬國史直譯』 (中外堂、明治 18 年 12 月 25

日版權免許) 第四十章「亞非利加ノ續キ (原書百四十五頁) / 埃及ノ建築術及

スカルプチュアー

彫刻術」に次のような箇所がある。

スフィンクス イジプチアン、アンチクイテース キュリーオース  
 (9) 獅身女面ガ埃及古物ノ中チデ最モ奇ナルモノ、ハーデアル」其

オリジナリー、ライオン ボジー ジガンチツク ヘッド  
 レガ 原來獅子ノ體ニ於テ女ノ長大ナル頭デアリシ然シナガラ

ローバート アバース、レメインス  
 下部ハ今マ砂中ニ葬ラルハ」地面ノ上ニ存スル處ノ部分ハ頭ト而シテ

子ツク ソリッド、ロック  
 頸デアル」是等ハ二十七 (フィート) 高クアル而シテ堅キ岩カラ造ラルハ」

ジスタンズ

フラット、ノースド

隔ニ於テハ其レガ恰カモ大ヒナル 扁 鼻 ノ婦人ガ砂カラ上リツヽアリ

シカノ如ク見ユ (169-70) ※ “<sup>フラット、ノースド</sup>扁 鼻” の左に “ヒラタキハナ” のルビ。

訳述者の戸代は東京府士族で、Goold Brown『<sup>容易</sup>英文典直譯』(大倉書店、明治 20 年)の訳書もある。

② Samuel Augustus Mitchell (松村精一郎 訳、荒井郁之助 校閲・校訂、中村正直 序)『<sup>訂定</sup>萬國地誌階梯』巻之下(白樂圃、明治 14 年 2 月 24 日版權免許、明治 19 年 2 月 24 日改題、明治 19 年 3 月 8 日刻)「亞非利加太洲」の「埃及」の項に次のような箇所がある。

今ニ至ツテ宏壯ナル遺趾多ク。金字形ノ大石塚ハ。基脚ヨリ頂點ニ至リ。五百尺アリ。又(スフィンクス)ト云女頭獅身ノ怪像アリ。其體半ハ沙ニ埋ム。(61)

対応する英語原文は①参照。ページ数から見て、『<sup>訂定</sup>萬國地誌階梯』に依拠したことが明白だが、“基”が“基脚”に、“頂”が“頂點”に、“スフキンクス”が“スフィンクス”に改訂されている。なお、校閲・校訂者の荒井(1836-1909)は、軍艦操練所頭取など海軍に深く関わった旧幕臣で、函館戦争にも参加。維新後は新政府に出仕し、開拓使仮学校初代校長(故に“北海道教育の先駆者”とも呼ばれる)や初代中央気象台長などを歴任。東京府平民(従五位)で、(編)『英和对譯辭書』(小林新兵衛、明治 5 年)、(訳述) David M. Warren『地理論略』(文部省、明治 12 年)、(演)『海上危険ノ時油ヲ撒スルノ説』(菊澤清光、明治 22 年)の編著・訳書・著書がある。

③ William Swinton (植田 榮 訳、岡 千仞[鹿門]・坪井九馬三[文学士] 校閲)『<sup>訂定</sup>萬國史』(岩本米太郎・酒井清蔵、明治 17 年 7 月 2 日版權免許、明治 19 年 2 月 16 日改題届、明治 19 年 6 月出版)巻一「古代東洋諸國」第二編「埃及」第二章「文明概論」に次のような箇所がある。

市府	[前略]「メンフィス」ハ三角洲ノ頂尖ヲ距ル凡ソ十二里其舊趾 今存スル者稀ナリト雖トモ「ギーゼ」ノ大墓地猶存ス宏壯ナ ル尖塔、巨大ナル獅面女身ノ像巍立シ、岩石ヲ刻ミテ製セル 墳墓數里ニ連亘ス[中略]
建築術	埃及人ハ技術ニ巧ミニシテ殊ニ其天性建築ニ妙ナル驚クニ堪 ヘタリ而シテ其主トスル所ハ宏大、莊嚴ナルニ在リ獅面女身 ノ大像、方尖形ノ巨碑ヲ一觀スレバ宮殿、神廟、彫刻極メテ 精細ニシテ其内ニ莊嚴ヲ極ムル幽暗ナル數大室アリ方今ノ大 寺モ以テ其一室中ニ容ルハニ足ル

(26-27)

増訂再版 (明治20年8月25日届、明治20年10月出版) では、該当ページが28-29ページに変わったものの、該当箇所には異同はない。増訂3版 (明治23年10月25日) の該当ページは増訂再版と同じだが、該当箇所にはかなりの異同がある。特にスフィンクスについては、“獅面女身”が“女面獅身”に訂正された。訳者の植田 (1860-91、号は精軒) は、土佐出身の東京府平民でジャーナリスト。『東洋法学叢誌』 (明治20年1月9日創刊) の持主。同じく Swinton 関係では (挿訳) 『<sup>スウキン</sup>第二<sup>リ</sup>獨案内』 (富山房、明治20年)、また『日本及基督教』 (美以雜書会社、明治23年) の著書がある。

◎維廉斯因頓 [William Swinton] (松島 剛 訳、松島鍊之助 校) 『萬國史要』上巻 (松島 剛、明治19年4月16日版權免許、明治19年7月出版) 第一編「古代東洋諸國」第二章「エジプト (EGYPT)」(二)「エジプトの文明」に次のような箇所がある。

都府	(三十七) [中略]メムフィスはナイル河口なる三角地の上方十二哩にあり。今日に於てハ、其墟址殆と見るべからずと雖も、其ギーゼ(Gizeh)の地にある墓地ハ尚依然として存す。此地にハ彼の大尖塔及獅身女面の巨像あり、又岩石を刻みて作れる墳墓、数里に延亘す。[後略]
建築	(三十八) エジプト人ハ技術上に於て進歩せし所少からざりしが、殊に建築に於て最も著名にして、其築造の才智に富みしこと實に驚くに堪へたり。而してその建築上に於て特に長ずる所ハ、その廣大と壯嚴なるとに在り。彼の巨大なる獅身女面の像、並に方尖石碑の列立する者に従て進行すれば、則ち奇異高大なる宮殿堂宇數多あり、彫刻極めて精美、且房室宏壯偉大にして、能く方今の最大なる寺院をもその内に容るゝを得ん。

(35-36)

翻訳の底本は 1884 年版。後に『萬國史要』上巻は、中巻 (第三編「ローマ史」・第四編「中代史」、下巻 (第五編「近代史」) と合綴されて出版された。第 3 版 (明治 21 年 6 月 27 日) で訂正されたが、訂正 17 版 (明治 36 年 4 月 1 日) でも該当箇所に変更はない。訳述兼出版人の松島 (1854-1940) は、和歌山県 (後に東京府) 士族で教育者。英語・地理関係の教科書・参考書類の著作が多いが、Herbert Spencer『社會平權論』(報告社、明治 14-17 年) のような訳書もある。校者の松島鍊之助は剛の弟で、『<sup>舊令</sup>通俗徴兵令解附關係例規』(樂天書房、明治 22 年) の編著がある。

⑨維廉斯因頓[William Swinton] (井上経重 訳述、久米金彌[文学士] 訂正、江木衷[冷灰]・島田三郎・佐藤精明[雙峯] 序)『<sup>舊</sup>萬國史鑑』第壹冊『東方帝王國之部』(淡海書屋、明治 18 年 12 月 25 日版權免許、明治 19 年 7 月出版) 第一篇「東方古代ノ帝王國」第二章「埃及」第二款「埃及ノ開化」に次のような箇所がある。

都府	第三十七節 [中略] <u>メムフ</u> <sup>キ</sup> <u>ス</u> ハ三角洲尖頭ノ上殆ント十二里ノ所ニ在リ今其遺蹟ヲ存セスト雖トモ <u>ギーゼ</u> ニハ尚ホ其大塋ノ存スルヲ見ル又此地ニハ大金字塔アリ巨大ナル女面ノ獅像及ヒ岩石ヲ開鑿シテ數里ニ及ヘル所ノ墳塚アリ[後略]
造營	第三十八節 <u>埃及</u> 人ハ工藝ノ諸科ヲ善クシ特ニ造營ノ術ニ至リテハ大ニ進歩セル者ニシテ其人種ハ實ニ驚ク可キ建築ノ天性ヲ具フ而シテ其造營ノ大ニ他ト異ナル者ハ廣大ニシテ且ツ高壯ナルニアリ巨大ノ女面獅像街頭ニ比ヒ[後略]

(30)

翻訳の底本は 1879 年版。訳者の井上 (号は馬陵) は東京府平民で、高木豊三 (講述) 『刑法講義録』 (警官練習所、明治 19 年) を筆記している。訂正者の久米は東京府士族で、東京専修学校文学・法学教諭 (後に特許局長)。『高等警察論』 (井上経重、明治 19 年) ・ (『高等警察論』の改題) 『警官實用』 (伊藤書店、明治 22 年) の著書の他、George Charles Brodrick 『<sup>英</sup>地方政治論』 (哲學書院、明治 21 年) の訳書もある。